

実践報告

学生の学習意欲を向上させる —作業療法学概論Ⅱにおけるアクティブラーニング—

伊藤 斉子

兵庫医療大学リハビリテーション学部

Improvement of Learning Motivation of Student, Using Active and Participative Strategy in
Introduction to Occupational Therapy II

Masako ITOH

School of Rehabilitation, Hyogo University of Health Sciences

抄 録

初年次の前期時期は、高校までの勉強から大学教育の本質である主体的な学修へと知的に跳躍すべき時期とされる。そこで初年次前期に配当される「作業療法学概論Ⅱ」では、アクティブラーニング（障がい当事者の手記読書、地域で生活しておられる障がい当事者の方の講義（体験談）の傾聴、グループ討議）の手法を用いて、学生同士が刺激を受け合いながら豊かな人格を育み、学生の作業療法士になろうとする動機付けや学習意欲を高めるために授業内容を工夫した。今回、平成29年度作業療法学履修生の教育効果について検討した。その結果、授業評価（5段階）の最高得点項目は「この授業で知識が得られ自分の考えを深めることができましたか」が4.71、「この授業に意欲的に取り組みましたか」は4.57であり、大学全体やリハビリテーション学部全体の平均点よりも高い値を示した。回答者のうち28.6%が自由記述欄に、「対象者の思いが少しでも理解できるようになった」という記載を認めた。これらの結果から、本授業を通して学生は学習意欲を高め、知識や思考力を深めることができ、教育目標のうち主目標である「当事者の実際の生活場面で遭遇している困難、痛み、苦しみについて共感的理解を深める」ことがほぼ達成できたと考える。

キーワード：動機付け、アクティブラーニング、当事者、作業療法学概論Ⅱ

I はじめに

アクティブラーニングとは、2012年8月の中央審議会答申によれば、「学習者である生徒が受動的となってしまう授業を行うのではなく、能動的に学ぶことが

できるような授業を行う学習方法」である。生徒が能動的に学ぶことによって、「認知的、倫理的、社会的な能力、教養知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る」とされている。課題解決型能動的学修と言われ、グループ・ディスカッション、ディベート、グループ・

	1年次	2年次	3年次	4年次
大学生のリテラシー	◎アカデミックリテラシー ◎医療概論			
導入教育科目	◎数理学入門 ◎生物学入門			
基礎科目	◎健康スポーツ科学Ⅰ・Ⅱ ◎心理学 ◎生命・医療倫理学 ◎臨床心理学（カウンセリング論を含む） ◎社会福祉学 * 選択基礎科目			
外国語	◎基礎英語 ◎英語会話 ◎第2外国語	◎科学英語 ◎応用英語		
臨床体験	◎早期臨床体験実習			
基礎医学	◎解剖学Ⅰ・Ⅱ ◎運動学Ⅰ	◎解剖学実習 ◎運動学Ⅱ ◎運動学実習 ◎生理学 ◎生理学実習 ◎病理学		
臨床医学	◎精神医学Ⅰ	◎精神医学Ⅱ ◎内科学Ⅰ・Ⅱ ◎神経内科学Ⅰ ◎整形外科Ⅰ・Ⅱ ◎小児科学	◎一般臨床医学 ◎リハビリテーション医学 ◎神経内科学Ⅱ ◎感染予防学 ◎臨床薬理学	◎総合スポーツ医学特論 ◎医療安全特論 ◎救急・災害医療
医療と社会	◎リハビリテーション概論	◎公衆衛生学	◎看護論 ◎薬学概論 ◎医療統計学演習 ◎医学英語	
チーム医療		◎チーム医療概論		◎チーム医療論演習
基礎作業療法学	◎作業療法学概論Ⅰ ◎作業療法学概論Ⅱ ◎作業活動学実習Ⅰ	◎作業活動学実習Ⅱ	◎作業療法管理学 ◎作業療法研究法	◎作業科学
作業療法評価学・治療学	◎作業療法評価学	◎作業療法評価学実習 ◎リハビリテーション評価学実習 ◎身体障害評価学 ◎義肢装具学 ◎精神障害評価学 ◎運動発達論 ◎発達機能評価学	◎身体障害治療学Ⅰ・Ⅱ ◎身体障害治療学演習Ⅰ・Ⅱ ◎精神障害治療学Ⅰ・Ⅱ ◎精神障害治療学演習 ◎発達障害治療学 ◎発達障害治療学演習 ◎老年期障害評価学 ◎老年期障害治療学 ◎福祉機器論 ◎認知障害治療学 ◎認知障害治療学演習 ◎社会生活技能論 ◎作業療法症例演習	◎作業療法特別演習
地域作業療法学			◎地域作業療法学 ◎地域作業療法学演習 ◎日常生活援助論 ◎職業生活援助論	
臨床実習	◎見学実習	◎基礎臨床実習	◎評価実習 ◎総合臨床実習Ⅰ	◎総合臨床実習Ⅰ・Ⅱ
総合演習				◎卒業研究

◎必修科目、○選択科目
*〈選択基礎科目〉
化学、物理学、生物学、統計学、哲学、人間発達学、芸術学、社会学、教育学、法学（日本国憲法を含む）

図1. リハビリテーション学部作業療法学科履修系統図（平成25年度～平成29年度入学生用）

リハビリテーション学部作業療法学科のカリキュラムは、作業療法を実践するために必要な作業療法学、医学、医療、保健、福祉、行政などに関する知識を修得するものである。この履修系統図はそれをどのように達成するかの道筋を示したものである。

ワークなどによる取り組みがなされる¹⁾。

「作業療法学概論Ⅱ」は、履修系統図(図1)において、専門分野、基礎作業療法学の初年次前期に配当される教育科目である。第1学年次の前期時期は、高校までの勉強から大学教育の本質である主体的な学修へと知的に跳躍すべき時期とされる。そこで本授業では、アクティブラーニングの手法を用いて、学生同士が刺激を受け合いながら豊かな人格を育み、学生の作業療法士になろうとする動機付けや学習意欲を高めるために授業内容を工夫した。今回、平成29年度作業療学科履修生の教育効果について検討したので報告する。

Ⅱ 方法

1. 対象

授業の履修者は本学作業療学科平成29年度1年生43名であった。

2. 授業概要

1) 授業のねらいとカリキュラム上の位置づけ

対象者が実際の生活場面で遭遇している困難について共感的理解を深めることは、豊かな人格を育むとともに作業療法士を目指すうえでの第一歩となる。本講義では、障がいのある人が家族や社会の一員として送る人生を、当事者の体験談の傾聴や手記を通して深く理解・体感する経験を通して、作業療法士として人々の幸福と共生に奉仕する精神を培う。

また、様々な障がいによる症状が生活に与える影響を具体的事例として知ること、今後学ぶ知識を活かしたものと修得する基盤を養う。初年次教育の一環を担う授業科目としても位置付けており、大学生の学業に必要な読解力、文章力を修得する。

2) 教育目標

アクティブラーニング(当事者の手記読書、地域で生活しておられる障がい当事者の方の講義(体験談)傾聴、グループ討議)(図2)を通して以下の7項目の目標に到達する。

- (1) 作業療法士に求められる資質と適性について理解する。
- (2) 障がい当事者の方が、実際の生活場面で遭遇している困難について、共感的理解を深める。
- (3) 障がいをもつ方の立場になって考え、痛みを感じることで豊かな人間性を育む。
- (4) 多様な障がいにおける心身の特性や生活機能につ

いて理解する。

- (5) (4)の心身の特性に対処する知識と技術について自分なりの意見を述べる。
 - (6) 作業療法の意義と役割について考察する。
 - (7) 自身の作業療法士になろうとする動機づけを高める。
- 3) 達成目標
- (1) 対象者中心主義(client centered)とは何か説明できる。
 - (2) インフォームドコンセント(informed consent)はなぜ必要か説明できる。
 - (3) 作業療法士にとって必要な3つの資質領域(知識・技術・態度)について説明できる。
 - (4) 国際生活機能分類(ICF)の枠組みを説明できる。
 - (5) 対人サービスに必須の身につけるべき対人技能やコミュニケーション技能について説明できる。
 - (6) 作業療法士に求められる態度や習慣について説明できる。
 - (7) 当事者の手記読書と体験談の傾聴によって、自身が感じ・気づき・考えたことなどをまとめて論述できる。
 - (8) 障がい受容の段階について、説明できる。
 - (9) 「当事者の体験談」を傾聴して、障がい受容の過程、生活史(ナラティブ・スロープ)について整理できる。
 - (10) 「当事者の手記読書」を通して、学んだ点(主人公の才能・興味・関心、障がい受容の過程、障がい特性、良かった作業療法支援などに留意)について、グループで討議し、発表できる。
 - (11) 作業療法の意義や役割について、自分の意見を述べることができる。



図2. 「作業療法学概論Ⅱ」におけるアクティブラーニング

4) 授業計画

各回の授業内容については表1に示す（8コマ）。
 ほぼ、2週間おきで構成することにより、授業に対する事前の取り組みとして、「当事者の手記²⁵⁾の読書」

の予習で授業内容を理解しやすくするように工夫を図った。表2に手記の要旨などを示す。

授業に対する事後の取り組みとしては、8回のうち、小テストを3回（表1）実施し復習と学生の知識の定

表1. 授業計画（ほぼ2週間おき 8コマ）

No.	回(日時)	主題と位置付け	学習方法と内容	小テスト/課題
1	平成29年 4月26日(水)3時限	オリエンテーション	・障がい受容の過程について	
2	5月10日(水)3時限	対人サービスとは？	・対象者中心主義の考え方	○障がい受容 ○グループワーク 胃ろうと人工栄養法
3	5月24日(水)3時限	作業療法士にとって必要な技術と態度	・傾聴態度 ・対象者との協業	○対象者中心主義
4	6月7日(水)3時限	障がい当事者の心の軌跡	・脳卒中障がい当事者の体験談を傾聴する。 テーマ「脳卒中発症からの心の軌跡と作業所開設の動機」	
5	6月21日(水)3時限	生活史(ナラティブ・スロープ)	・当事者の体験談を生活史にまとめる	
6	6月28日(水)3時限	作業療法士にとって必要な知識	・国際生活機能分類(ICF)と障害構造	
7	7月12日(水)3時限	チームアプローチ	・グループ・ワーク：主人公の障害受容を促進した因子は何か？ ・グループ・ワーク(発表準備)	○ICFとICIDH
8	7月26日(水)3時限	まとめ	・グループ発表 ・授業のまとめ	

表2. 当事者の手記と要旨

手記の著者名・当事者	書籍名	出版社	当事者のもつ障がい	当事者の年齢(執筆当時)	要旨(引用：Bookデータベース)
1 館野 泉	命の響	集英社	脳卒中による後遺症(右半身麻痺など)	70歳代	78歳、現役、この生き方こそがまさに奇跡。日本を代表するピアニストが舞台上で倒れ、右半身麻痺…困難な状況を克服し、「左手のピアニスト」として復帰。決してあきらめない不屈の精神と、しなやかでユーモラスな生き方が人々を魅了し、新たな音楽を生み出していく…。
2 多田 富雄	寡黙なる巨人	集英社	脳卒中による後遺症(四肢麻痺、構音障がい、嚥下障がい等)	70歳代	病を得て、真に「生きた」。 2010年4月に惜しまれながら逝去した世界的免疫学者の多田富雄氏は、2001年に脳梗塞に倒れ半身不随、声を失いながらも懸命のリハビリで文筆活動に復帰した。その壮絶な闘病記と、珠玉のエッセイ集。第7回小林秀雄賞受賞作。
3 山田 規畝子	壊れた脳生存する知	角川ソフィア文庫	高次脳機能障がい	50歳代	3度の脳出血で重い脳障害を抱えた外科医の著者。靴の前後が分からない。時計が読めない。そして、世界の左半分に「気がつかない」…。見た目の普通さゆえに周りから理解されにくい「高次脳機能障害」の苦しみ。だが損傷後も脳は驚異的な成長と回復を続けた。リハビリをはじめとする医療現場や、障害者を取り巻く社会環境への提言など、障害の当事者が「壊れた脳」で生きる日常の思いを綴る。諦めない心とユーモアに満ちた感動の手記。
4 ドナ・ウィリアムズ	自閉症だったわたしへ	新潮文庫	自閉症スペクトラム	30歳代	わたしってそんなに「変でおかしな子」なの？幼い頃から、周囲の誰ともうまくつきあうことができず、いじめられ、傷つき苦しみ続けた少女。家族にも、友達にも、学校にも背を向け、たった一人で自分の居場所を求めて旅立った彼女が、ついに心を通い合わせることができる人にめぐりあい、自らの「生きる力」を取り戻すまでを率直に綴った、鮮烈にきらめく、魂の軌跡の記録。

着を図った。毎回の授業内か授業後に課題レポートの提出を求めた。

最終回（第8回目）にグループ発表会を行った。課題内容を表3に示す。発表時間は7分、質疑応答は一件とした。発表評価のルーブリックを表4に示す。

5) 今年度の改善点

(1) 手記の読書課題を変更した。

昨年度5冊であったが4冊に減らした。『命の響 左手のピアニスト、生きる勇気をくれる23の言葉』を追加した。

この手記は障がいをもちながらも、失敗をおそれず、明るく前向きに挑戦し続けるあるピアニスト館野泉氏の手記である。また館野泉氏の左手のみの演奏場面(映像と音声)も教材として活用した⁶⁾。

学生は音楽を趣味とする者も少なくなく、学生の取り組み状況からこの手記の主人公に共感し学生の学習

意欲が向上した様子が見えてきた。

以下に、授業で紹介した『命の響』における「障がい受容」に関する記述を示す。

…息子が帰り際にそっと1枚の譜面を置いていったんです。『左手のための3つのインプロヴィゼーション』(ブリッジ)。第1次世界大戦で右手を失った親友のピアニストのためにつくられた曲でした。

何気なく弾き始めたら、自分を閉じ込めていた氷河が一瞬にして溶け、青い大海原が目の前に現れたような気がしました。左手だけの演奏なのに、音が薫り、漂い、爆ぜ、一つのまとまった姿となって花開いていく。脳出血で倒れる前と同様に、ピアノを弾くことで世界と自分が一体になっていく…。

ハッとしました。それまで僕は、ピアノというのは両手で弾くものだと思い込んでいたけれど、そうじゃなかった。「音楽をするのに、手が1本か2本かなんて関係ない。左手だけでも十分に十全な表現ができる」

倒れてからの日々は、何をしても虚ろで生きている実感がないという感じでした。それがブリッジの曲と出会って、また生き生きとした自分に戻れたんです²⁾(p14)。…

学生は作業療法士として対象者の障がい受容を促すための態度を学んだ。「そっと譜面を置く」という励まし方を知り、対象者の方自らが障がいに向き合っているのかを考えた。言葉で何度も励ますのは逆効果の場合もある。その対象者に合った態度で示すことの重要性を学生は学習した。

(2) 著者は、作業療法士であるとともに当事者の家族

表3. グループ発表「当事者の手記」読書課題(発表時間：7分)

I	はじめに グループで、4冊のうちなぜその1冊を課題図書として話し合い選択したのか？
II	手記の要旨 スライド1枚に簡潔にまとめる。
III	主人公の生活史(ナラティブ・スロープ) ・手記から主人公の人生の良かった時期、悪かった時期を折れ線グラフで表す。 ・主人公の気持ち ・本音を丁寧に読み取る。
IV	主人公の障がい特性 ICF(図)を用いて整理する。
V	主人公から見た望ましい介入
VI	考察

表4. 「当事者の手記」読書課題 グループ発表 ルーブリック

項目	採点基準	採点
I 発表準備	発表用原稿を準備しているかどうか？ 事前に練習をしているか？ぶっつけ本番はいけない。	1・2・3・4
II 発表時間	発表時間(7分)を守っているかどうか？ 超過しても短すぎてもいけない。(満点は6分30秒から7分)	1・2・3・4
III 発表テーマと内容	発表テーマ・内容は、課題を網羅しているかどうか？ 偏った内容になっていないかどうか？	1・2・3・4
IV わかりやすさ	プレゼンテーションはわかりやすいかどうか？ 図などを用いて工夫しているかどうか？	1・2・3・4・5
V 話し方(態度)	態度、特に話し方は、聴衆に聴いてもらうに耐えられるものかどうか？ 声は小さくないか？	1・2・3・4
VI 協力度	グループのメンバーはコミュニケーションを良くとり、役割分担し、 協力し合って取り組んでいたかどうか？	1・2・3・4
		計 _____点/25点

として学んだことも内容に組み入れた。

①当事者の家族からみたリハビリテーションの意味

著者は、平成26年に亡くなった自分の父親（脳卒中の後遺症による右半身まひ、嚥下障がい、構音障がい）が非常に熱心に理学療法、歩行訓練に取り組んでいたこと、そして、その日の夜の面会では、理学療法のなかった日に比べて、寝たきりの父親の表情が充実感にあふれていたことを学生に伝えた。私は父親がなぜ日常生活の実用性がなかったのに、歩行訓練に熱心に取り組んでいたのかについて考え続けていた。

多田氏の手記³⁾(p94)にその答えが見つかった。

…電動車椅子で動けばいいのだ、と思う人がいると思うが、そうではないのだ。どんなに苦しくても、みんなリハビリに精を出して歩く訓練をしている。なぜだろうか。

それが人間というものがあるからだ。…四百万年前人類とチンパンジーが分かれたとき、人は二足歩行という移動法を選んだ。それによって重い脳を支え、両手を自由に使えるようになった。この二つの活動は互いに相乗的に働き進化を加速させた。歩くというのは人間の条件なのだ。

だから歩けないというのはそれだけで人間失格なのだ。

単に理学療法は基本的動作の回復とか作業療法は応用的動作の回復とか、そうではない。多田氏にとっても、私の父親にとっても、歩くことは人間の尊厳の回復であったと考えた。理学療法、作業療法、リハビリテーションは、言い換えれば、人間の尊厳の回復を支える仕事であることを学生は学んだ。教員の実体験に説得力を感じたと考えられる。

②当事者からみた嚥下障がいの苦しみ

著者の父親も多田氏も嚥下障がいがあった。その苦しみは教科書からでは想像が難しい。

多田氏の想い³⁾(p.20-24)は下記である。

…喉にはいつも痰のようなものが絡んでいた。しつこい痰が、いつまでも胸にひっかかっているどうしようもない苦しさだ…看護師は吸引機につながった管を喉に差し込んで、痰をひく。そうしないと肺炎を起こす危険があるのだ。

しかし喉の痰はいったんとれても、胸の奥でずるずるいつている。しつこい痰は取れていない。そちらの方がもっと苦しい…。

毎夜毎夜執拗な痰に苦しめられ、看護師に引いてもらう。引くのが上手な人もいれば、何度やっても

引けない看護師もいる。…

看護師の中に、これが上手な人がいる日は安心だが、いない日は喉の痰が一日中気になる。夜になると痰の苦しみに耐えがたく、胸を切り裂いても痰を出したいと、ベッドの中で思い悩むのだった。…

これらの記述を用いて当事者の苦しみを紹介したのち、胃ろうに関する新聞記事を学生に紹介、人工栄養法（表5）に関するグループワークを課した。

- (3) 講義の進行に際して、学生の理解度の確認、学生との相互交流を心がけた。
- (4) 小テストは、坂口⁷⁾が紹介したカンニングペーパー（A4サイズ両面手書き）を参考として持ち込み可能とした。
- (5) グループワークでは、ペアワークも数回、組み入れた。
- (6) 学生から提出された課題は、できるだけ早く返却するように心がけた。

Ⅲ 結果

1. 授業評価結果（5段階評価）

図3に平成29年度授業評価結果を示す。本授業は平成29年度の大学全体の授業の平均値と比較して、すべての項目において高い値を示した。リハビリテーション学部の授業の平均値と比較すると12項目のうち、項目3と項目4以外の全ての項目において高い値を示した。

12項目のうち、最高点は項目11「この授業で知識が得られ自分の考えを深めることができましたか」が4.71であり、また、項目2「この授業に意欲的に取り組みましたか」は4.57であった。

表5. グループ・ワークの例：人工栄養法について、それぞれのメリット・デメリットを調べなさい。

		メリット	デメリット
経腸栄養法： 胃や腸に管で 補給する	胃ろう：腹部に穴を開けて直接、胃に栄養を送る		
	経鼻経管栄養法		
静脈栄養法	中心静脈栄養法：心臓に近い静脈に大量の栄養液を入れる		
	末梢（まっしょう）静脈栄養法（点滴）		

2. 授業評価 自由記述欄

表6に授業評価の自由記述欄「興味深かった点、学びが促進された点、良かった点」の回答内容を示す。回答数は42名中14名(33.3%)であった。最も多かった回答は、「実際に障がいをおもちの方のお話を聞けたり、手記を読んだりしたことで、対象者の思いが少しでも理解できるようになった」(14名中4名で28.6%)であった。

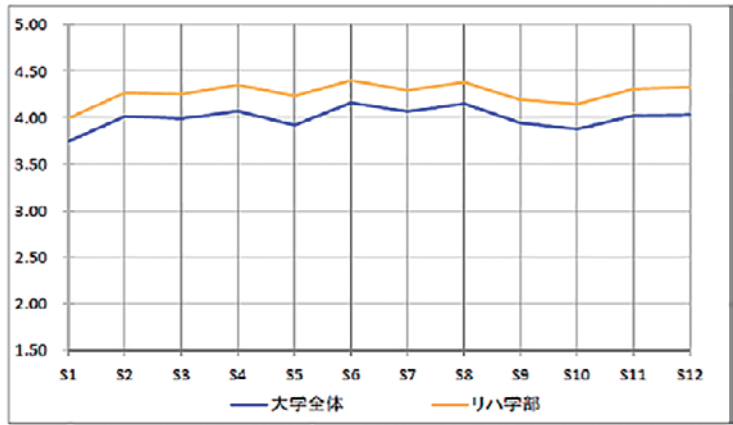
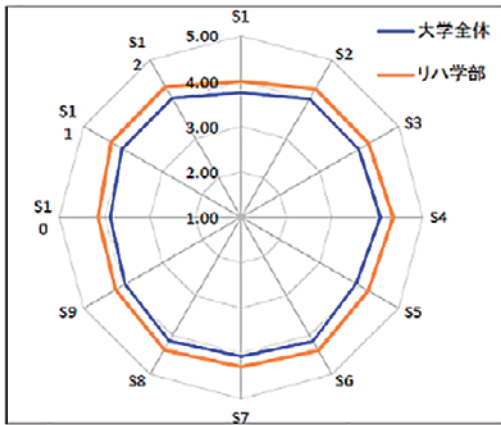
の授業で知識が得られ自分の考えを深めることができましたか」で4.71、また、項目2の「この授業に意欲的に取り組みましたか」は4.57であった。大学全体とリハビリテーション学部全体の授業評価の平均値と比較して高い値を示した。また、授業評価の自由記述欄に、「対象者の思いが少しでも理解できるようになった」という記述を回答者のうちの28.6%に認めた。

これらの結果から、本授業を通して、学生は学習意欲を高め、知識や思考力を深めることができ、教育目標のうち主目標である「当事者の実際の生活場面で遭遇している困難、痛み、苦しみについて共感的理解を深める」ことは、ほぼ達成できたと考える。

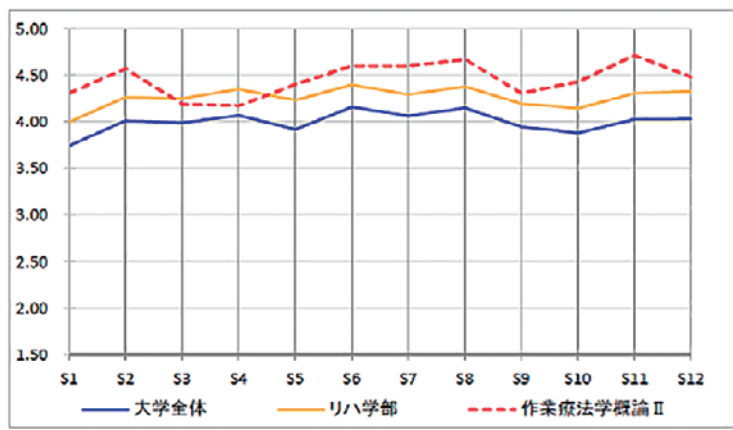
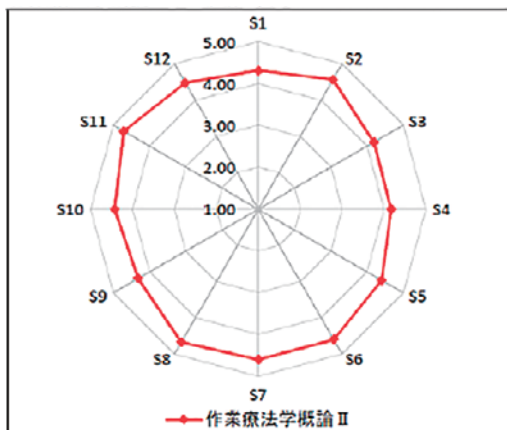
Ⅳ 考察

本授業の実践の結果、授業評価の最高得点項目は「こ

平成29年度 前期 授業評価 平均値 《リハビリテーション学部》



作業療法学概論Ⅱ / 伊藤斉子



5 大変そう思う 4 そう思う 3 普通 2 そう思わない 1 全くそう思わない

回収率98%(対象者42名/履修者43名)

1	この授業のために予習・復習をしっかり行いましたか	4.31
2	この授業に意欲的に取り組みましたか	4.57
3	授業の構成と方法は良かったですか	4.19
4	教員の話し方は明瞭で聞き取りやすかったですか	4.17
5	学生の理解の程度を把握して授業を進めていたと思いますか	4.40
6	教員の授業に対する熱意・意欲を感じましたか	4.60
7	到達目標や評価方法がわかりやすく示されましたか	4.60

8	シラバスに沿った授業内容でしたか	4.67
9	予習・復習についてわかりやすく示されましたか	4.31
10	この授業を理解できて到達目標を達成できたと思えましたか	4.43
11	この授業で知識が得られ自分の考えを深めることができましたか	4.71
12	総合的に判断してこの授業に満足できましたか	4.48
	平均値	4.45

図3. 平成29年度 授業評価結果

表6. 授業評価 自由記述欄 (33.3%回答数14名/42名)
興味深かった点、学びが促進された点、良かった点

実際に障がいをおもちの方のお話を聴けたり、手記を読んだりしたことで、対象者の思いが少しでも理解できるようになった	4
グループ発表ができて良かった	3
小テストが定期的に行われることで、しっかり復習でき授業内容が定着しやすかった	2
手記を読んだり、ナラティブスロープを実際に書いてみると、自主的に学ぶ機会がたくさんあって良かった。	1
ナラティブスロープの書き方を学ぶことができて良かった。興味深かった。	1
手記を読む中で高次脳機能障害をはじめとした脳の障害と生活場面の困りごとを関連づけて学べた。	1
授業のスピードがとても良かった。	1
現場の映像を見ることもできてためになった。	1

松下⁸⁾は、「学生の関与」とは「ある連続体上で経験され、動機づけとアクティブラーニングの間の相乗的な相互作用から生み出されるプロセスとプロダクト(産物)である」と定義づけ、動機付けとアクティブラーニングからなる二重らせんモデルによって学生の関与についての教室ベースモデルを描き出した。

本授業におけるアクティブラーニング(当事者の手記読書、地域で生活しておられる障がい当事者の方の講義(体験談)の傾聴、グループ討議)(図2)は、松下の定義する「学生の関与」が成功し、学生の学習意欲に結びついたと考える。

V 謝辞

上野義男様(脳卒中者中途障がい者生きがい働きネット理事/前・尼崎市リハビリ友の会会長)には、開学以来12年間、地域で生活している障がい当事者として体験談「脳卒中発症からの心の軌跡と作業所開設の動機」をテーマに、学生たちにつらい体験も時にはユーモアを交えながら語り続け、将来、作業療法士になろうという学生たちを励まし続けてくださっています。また足立鐘平様(尼崎市リハビリ友の会作業所第2作業所施設長)には、上野様の本学での体験談講義に当たり、心身両面からサポートくださっています。本授業の継続に当たりまして、お二人のご厚情に心から感謝申し上げます。

VI 引用文献

- 1) 文部科学省：中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」2012.8.24 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm(20180701閲覧)
- 2) 館野泉：命の響 左手のピアニスト、生きる勇気をくれる23の言葉。集英社、2015、ISBN978-4-08-781573-3。

- 3) 多田富雄：寡黙なる巨人。集英社文庫、集英社、2012、978-4-08-746592-1。
- 4) 山田規敏子：壊れた脳 生存する知。角川ソフィア文庫、角川学芸出版、2009、ISBN978-4-04-409413-3。
- 5) ドナ・ウィリアムズ著、河野万里子訳：自閉症だったわたしへ。新潮文庫、新潮社、2000、ISBN978-4-10-215611-7。
- 6) 館野泉：左手のピアニスト「館野泉80歳へのプロジェクト」
<https://www.youtube.com/watch?v=3PZW9H8aFWA>
- 7) 坂口顕、日高正巳：学生の学習能力を向上させる～物理療法学実習におけるアクティブラーニング～。兵庫医療大学紀要、2015、第3巻、第2号、p.59-65。
- 8) 松下佳代：ディーブ・アクティブラーニング。勁草書房、2016、ISBN978-4-326-25101-8。